



多くのボランティアが協力して盛り上げ、地域との交流の場となっている「夏祭り」

い雰囲気や環境づくりに力を入れている。

なかでも、入所者と接する機会の多いボランティアには、はじめのオリエンテーションで、施設の状況や、一人ひとりの入所者と接する際の留意点などを丁寧に説明することにポイントを置いている。その後は、職員たちが寄り添いながら

各自の専門性やスキルの向上を支援とともに、活動の中での悩みや困り事には、職員が相談にのるしくみをとっている。

地域のなかでボランティアの輪を広げるため

障害者施設に対する地域からの理解もすすみ、予想以上にボランティアの協力者が増えているいま、「千歳療護園」では、より積極的なボランティア活動への取り組みと、いかにしてボランティアの輪を広げるか、を課題としている。

今後は、ボランティアを受け入れながら、高齢者施設や生活困窮者への支援の拠点となるよう、県社協との連携をさらに強化し、地域におけるさまざまな問題を見つけて出し、その解決のための活動に携わっていきたいと考えている。

事例3 地域のなかの 身近な相談事業 「あんしんねっとあゆむ」

社会福祉法人 高槻市社会福祉協議会【大阪府高槻市】
<http://www.ta-city-shakyo.com/>

高槻市では、昭和60(1985)年3月、市内の保育、児童、障害、高齢関連の施設が、地域に開かれた施設として地域福祉の向上に努め、さまざまな福祉ニーズに対応していくことを目的に「民間社会福祉施設連絡会」が創設された。

高槻市社協を事務局として現在は53施設が加盟し、種別の異なる施設がそれぞれの専門知識・機能を活用しながら連携・協働している。

施設職員のボランティアによる相談支援活動

「民間社会福祉施設連絡会」が、さまざまな地域福祉活動を推進していくなか、児童施設からの提案による児童虐待防止のための相談支援をきっかけとして、平成17(2005)年4月に、相談支援事業「あんしんねっとあゆむ」がスタートした。

保育、児童、障害者、高齢者施設の分野で培った知識と人材を活用し、施設間の協力体制のもとで、地域のなかの悩み事、心配事の解決を支援するための相談事業である。



拠点施設と市社協による「あんしんねっとあゆむ」推進委員会

談コーナーを設置し、幅広い層を対象として年間50回、一日2時間ほど、事業に加盟している施設から派遣された職員が、2人一組の相談員として対応している。また、それぞれの施設にも相談窓口を設けて、近隣に住む市民からの相談を受け付け、内容に応じて専門分野の施設につなぎながら支援を行う。

さらに、相談を「待つ」ばかりではなく、地域に出てニーズをキャッチするという巡回相談の手法も平成15(2003)年度から取り入れられ、これには市社協職員も立ち会うことがある。

こうした相談対応では、各施設に社会貢献事業としての協力を要請し、また、一人ひとりの施設職員もボランティア精神で臨んでいるが、市民から寄せられる相談には、それぞれの専門以外の知識が求められる。そのため、相談員のスキルアップや学習の場としての研修会、講演会、グループワークなども定期的に実施し、互いの得意分野を見せ合いながら、連携体制を強化している。

「身近な福祉相談」の実施による効果と意義

「あんしんねっとあゆむ」の事業を支える体制として、4つの分野ごとに拠点施設があり、拠点施設の職員が中心となって、年6回～8回ほどの推進委員会を開催し、今後の方針などについての意見交換を行っている。そうした場には市社協の職員も加わり、自由に意見交換ができるしくみになっており、「身近な福祉相談」として種別分野に関係なく、困っている人に対応するように働き掛けている。

また、施設職員が地域に出て活動するためには、地域の状況を把握してもらう必要があるため、市社協で組織している地区福祉委員会のメンバーと施設職員による「お見合い」形式の情報交換の場も設定されている。今後は、さらに連携を強



社会福祉法人 高槻市社会福祉協議会
地域福祉課
やまだ しんじ
山田 真司 さん



「身近な福祉相談」として市民の悩み事、困り事に対応

化し、地域に根ざした事業として育てていくために、それが知恵を出し合っていく考えである。

事業がもたらす効果として、施設にとっては、職員が地域のなかで相談支援の活動に携わり、さまざまな機関につないでいったり、自分たちで解決することを通して、広く地域の人とふれあい、自分たちの施設の意義や取り組みをアピールできることが大きい。

一方、地域にとっては、例えば、見守り活動などで困ったときなどに、身近に相談できる場ができたということによる安心感が得られ、「あんしんねっとあゆむ」にかかる福祉専門職とのつながりもできる。

事例へのコメント

地域と施設を結ぶボランティアの役割

日本福祉大学准教授 原田 正樹さん

市社協としても、これまで推進してきた福祉活動のなかに、専門分野からのアドバイスや支援が加わることにより、さらに信頼性が高まることに意義を感じている。

網の目のような福祉ネットワークの構築をめざして

連絡会によって、種別を超えたネットワークが形成されることによって、さまざまな相談対応の幅が広がってきた。

相談支援事業「あんしんねっとあゆむ」での市社協の存在が、地域と施設を結ぶ接着剤の役割を担っており、地域の人にさまざまな社会資源を提供し、また、施設には地域の福祉ニーズをつなぐことによって、地域の課題解決を図ることが期待されている。

現時点では試行錯誤もあるが、地域に対して事業や取り組みを積極的にアピールしていくことで、将来的には、高槻市内の全37地区の福祉委員会や社会資源との連携を深め、「あんしんねっとあゆむ」が、網の目のような福祉ネットワークを構築することをめざしている。



最近はさらに進化して、福祉施設が地域福祉の拠点となろうとしている。その根底には「福祉施設は地域に対して何ができるか」という内発的な問いかけがある。とりわけ地域包括ケアシステムを構築していくことを意図して、施設が施設内サービスだけで完結せずに、地域住民とともに地域の安心・安全な生活を創出していくことによる取り組みが盛んである。社会福祉法人や福祉施設の地域貢献のあり方も各地で検討されはじめている。

今回、事例でも紹介されているように、福祉施設が地域と協働して地域福祉を推進しようという営みを「施設の地域化」と呼ぶ。ポイントは施設側の経営や都合ではなく、身近な地域のニーズに応えていること。そのためにひとつの施設だけで実施するのではなく、地域のさまざまな団体や住民と協働して実施していることである。

ボランティアは施設職員の代替でも、施設機能の補完するものでもない。ボランティアの声を施設運営に反映させられるような施設は、きっと利用者に対してもよいサービスを提供しているのであろう。加えて、福祉施設は福祉を体験的に学ぶ、もっともよい空間である。すなわち地域における「福祉教育の拠点」である。社会福祉のメッセージを地域に発信する拠点としての施設に期待したい。

